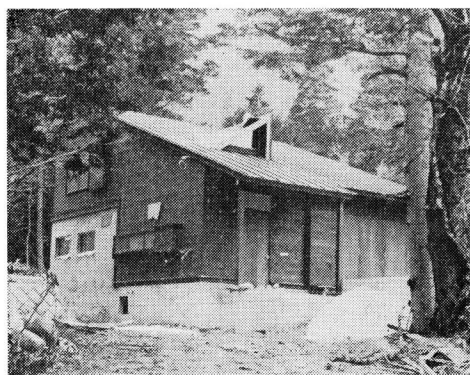




上高地山岳研究所は内装工事も終わり、ほぼ完成いたしました。
六月二、三日のウェストン祭に中屋、伊藤、伊倉、安彦、山崎、坂下の六人で、安曇建設の小西社長、上条氏らと会い、現場を見てきました。ちょうど

完成近い 上高地山岳研究所

募金にいま一層の御協力を

水洗便所の工事中で、まだあたりは掘りかえられたままでしたが、あとは水道、電話、電気の仕事を残すだけで、備品の搬入をすませれば、いよいよ完全にでき上ります。

問題は電気工事で、これがいまのところ、ちょっと中部電力との間に問題があり、開所式までには間に合わないと思いますが、それまでは何とか方法を考えたいと思っております。一昨年のウェストン祭のとき、松方、三田

さんを初め、お歴々がガンを頼をそろえ、上高地の環境庁出張所へあいさに出かけ、切った山岳研究所の建設も、三年がかりでようやくここまで漕ぎつけられたことを思うと感慨無量です。さて、残る問題は資金面で、会員募金は一応三月末締切りとありましたが、こ



昭和48年(1973年)
7月号(No. 337)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

委員会より

- 完成近い山岳研究所……山崎安治……1
再び山日記をめぐる……松丸秀夫……3

本文

- 中村清太郎さんと大井川奥山……日高新六郎……1
快晴の上高地に歌声は流れる……2

追悼

- ふたつの挨拶状……小野 幸……4
山と植物に生きた山下先生……坂倉登喜子……4
城山正三さんを追悼して……木村義昌……5
白石勝教さん逝く……貝森健治……5

会員通信

- 長須ケ玉山と台倉高山……望月達夫……6
山とパイプと地酒の味……柿原謙……6
若者よ、頑張れ……松村 高……6
大平洋から塩見岳が見える……山本朋三郎……6
雲の彼方に……内山正二郎……7
大井川の語源について……山本朋三郎……7
九山忌……山下久男……7

支部だより

- もう一つのウェストン祭……熊本支部……3
東海支部の現況と総会報告……中世古隆司……8

図書紹介

- 遙かなる末踏の根根……塚本珪……8

会務報告

- 五月理事会、等……8
ルーム日誌……9
図書室……9
新人、復活会員等……10
海外からの依頼……11

れを四十八年度まで延ばさないと目標額に達しません。現在八〇%ちょっとなので少くとも二〇%ほどにしたいと考えております。

安曇建設からの引き渡しは七月下旬、それからすぐ開所式を考えましたが、七月下旬から八月中旬までは、上高地は人の波なので八月下旬開所式、九月一日から一般会員へのオープンにしよう、六月十二日の山研委員会(安治)

中村清太郎さんと大井川奥山

日高信六郎

先ごろ引越しの際ふり手紙類を整理していたら、次のような中村さんからのハガキが出て来た。日付けは昭和二十七年九月初九となっている。

拝復御消息誠にありがたく拝誦よき御山行を祝します要を得た御記述で最近のあの辺の様子もよく判り御興趣の深さこそと拝察おかげで小生も往時の旅を回想大に感銘を新にしました甚だ愉快ですそして恐れていた山の俗悪化も思った程ではないやうにも思はれ聊か心を安んじました小生近年あの方面に御無沙汰して居り兼て遊意は多分にあり乍ら一つは

目に懸れば幸いです小生今夏は乗鞍に登り番所に暫く滞在しましたいづれ御面晤の節萬々
これは同月五日付で中村さんへ書き送った拙信の返事であるから、序でにそれも披露させていただきます。
「拝啓その後久しく御無沙汰いたしておりますが御元氣の事とお察し致します。私こと近頃少し暇がありますので時々山のぼりに出かけています。
七月月中旬から赤石山脈の方に出かけ、遠山川から入って易老、仁田、上河内、聖、赤石、悪沢とまわって大井川に下り、新倉に出て帰りました。運よく快晴にめぐまれ、一行五人案内人夫四人という大一座で、久しぶりに賑かな山旅でした。この方面は全くはじめてなのですが、大沢から聖岳までの南はまだ昔の面影を存しており、木を切った橋をかけた、密林の中にふるい鉈目をさがしたり、這松を泳いだり、ガレのふちを這松につかまっていたり、無数の鹿の足跡を水たまりのところに現出したり、人の通るすかなみちあとよりもっとハッキリした獣のみちを羨んだり、まことにうれしい旅をいたしました。帰来「大井川奥山の旅」をよみ返して、あの頃の山々のことや悪天候にお苦しみになつた山旅のことが身近く感ぜられ、聖岳頂上の三夜のことなどを、晴れたわつた日のひるのひとときを四方の展望に夢中になった私どもの山運のよさと引きくらべて、最後の日の晴れた朝のお氣持がわかる気がいたしました。(山の位置、地形その他の記述と判断の正確なことには本当に感心いたしました) 赤石から悪沢の方は小屋ができた、ジクザクのみちがついたり、ことに西俣の方はずい分上の方迄伐木がすすんでないところもあり、三四のパーティにもあって、多少索然たるものがありました。

実は今年の五月下旬に若い友人と二人で大目峠を越え、大井川を遡行し西俣に入って魚無河内の奥まで行って見ましたのも、むかし御いでになった旅の記事にそのかされたのでした。田代の村は依然鄙びていましたが、下手に立派な小学校ができた、諏訪神社の社頭に電柱がついたり、川を遡るのこともすっかりよくなり、殊に信濃俣の出合(沼平)の辺から上の東海バルブ(大倉山林)の領分はズツと川に沿ってみちがつけれ、傾斜五度を超えるところなしとしたことでした。みちはらくになり、樹は切られて、水の一部は発電のために早川に取られて、少くなり、昔のおもかげはなくなりましたが、いづれは大井川の下手にダムができて、井川は大部分田代も一部分水につかるということ、それでも人里はなれた谷のすがたはなつかしく(御いでになった時よりは却って開墾に入人たちの小舎が少なくなったよう、伊谷木賊などには何もありませんでした。)

時々見える雪山の頂に心をおどらせた。今は赤石渡からその俣川に沿って樺島に出るのですが、その吊橋の上から見た聖は立派で、し、樺島から鳥森山の頭のところ迄上って見た赤石と聖はともにステキでした。

二度の旅に御導き下さった上に、帰ってからもしみじみと南の山と谷のよさを味はしていただけあめしくあたたかい文章を残して下さったことを心からお礼申し上げます。

いま拙文をよみ返して見ると、山旅から帰って勿々まだ昂奮が、さめやらぬ気味のうわすった手紙で少し恥かしいのだが、中村さんに喜んでいただいたことで、私はほんとにうれしかった。

中村さんは幻滅をおそれて曾遊の山谷を訪ねることを大いにためらっておられた。昭和三十一年に双六小舎から出かけて、当時まだ人の知らない鏡平

とそここの池塘を見出して驚喜し、カンバスを据え槍と穂高に対して楽しみ、清見ヶ原と穂影ノ池の名を与えた。しかし上高地には入られなかった。

その頃お訪ねしたとき大井川再遊をすすめ、デンツク峠の頂に近い荷懸き小舎に泊って、悪沢から聖のほうを描くことをすすめ、大分意が動いた様だったが実現しなかった。

大井川のほうはこの年の十一月静岡支部主催のもみじ会で富士見峠を越えて井川に下り桑の木島の小舎で会心の一夜をすごし、そこでむかしの大井川入りのおり十歳の少年だった田代の滝浪善一さんと遭ってすっきりうれしくなり、同氏のところ数日を過ぎたことは、中村さんの記述があり、多数会員もご承知のことと思う。

中村さんの文章は鳥水さんがつとに推賞しただけあって、胸中にみみずる熱情を押えた筆致は読者の心にしみ入る。同時にその観察と記述が精緻で確実なことに驚かされる。またその描くところは詩情をたたえて見るものに山のいぶきを感じさせ、そのスケッチは自然のすがたを忠実正確にとらえる。「大井川山奥の旅」をのせた山岳には和紙に印刷した木版彩色のスケッチが添えてある。筑ヶ岳から北岳を望む図のごときは、同じ場所から同じ方角を眺めたとき、私はハツとさせた位に真をうつつしている。

中村さんのような純真な山好きを私は知らない。七十を過ぎてもくもりな眼と汚れない心を持ちつづけて、ひたむきに自然の殿堂にあこがれ、その奥にいます山をおろがんでおられる姿が今も眼に泛ぶのである。私どもの山旅から二十年を過ぎた。南アルプスの山と谷のよおすも、そこを訪ねる人々の風情もずいぶんかわった。なくなりなれた中村さんを想うことがしきりなのは、その所為かもしれない。

快晴の上高地に歌声は流れる

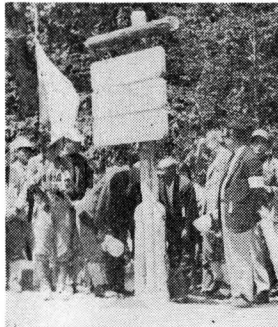
第二十七回ウエストン祭

六月三日の日曜日は、この時期としては珍しい、すばらしい快晴であった。ウエストン祭といえ、この三年ぐらいいつも雨で、傘をさしたり、ビニールの布をかぶったりして、寒さに震えながら早く終るのを待っていたのであるが、今年はほんとうに雲一つない快晴。くつきりと姿を見せる雪雲の穂高を背に、参加者は続々と梓川畔のウエストン師のレリーフの前に集ってきた。来会者は断然若い女性が多く、色とりどりのブラウスやセーターは、ここが上高地かと眼を疑うばかりであった。

頃アンナブルナで遭難、死亡された信濃支部隊員の方々を追悼され、ついでウエストン祭の由来を説明された。ウエストンの来日とその滞在、その間における小島島水氏、岡野金次郎氏ら日本登山界の先覚者との接触を語られ、またこのレリーフの作製とそれを守ってきた経緯を述べ、最後に、ウエストンの未発表の手紙の中に、ウエストンがいかに日本の山を愛し、かつ記念としてJACの会員賞を大切にされていたかを語られた。この手紙の詳細は別に解説していただきたいと思う。

午前十時ちよつと過ぎ、本会信濃支部の浦生明登氏の司会でウエストン祭の幕は開かれた。同じく信濃支部、井口謙司副支部長が先ず開会の挨拶。次いで本会副会長の織内信彦氏が挨拶された。(写真) 織内副会長は先ず、

次に特別講演として、本会永年会員であり、本日発表される「ウエストン祭の歌」の作曲者である辻庄一氏が壇に立たれた。辻氏は大正二年、中学三年生のとき徳本峠を越えて上高地を初めて訪問。その折、清水屋でウエストン夫妻と同行になり、朝暗いうちに騒々しく出発の用意をしていて、ウエストンから注意された話、また年の若いのによく山奥までやってきたと賞められたという思い出を語られた。そして今回「ウエストン祭の歌」を作曲されるまでのいきさつを語られ、さらに来年はもっとよい曲をつくると意欲の程を述べられた。



次に本会常務理事で自然保護担当の板倉勝正氏が「自然保護について」という短かい講話をされ、上高地の自然をどのように保護し、また破壊から守っていくかを熱をこめて話された。

次いで、安曇小学校四年の山本よし子、二本からは二少女によって、ウエストンのレリーフに対する献花が行われ、また全国花いっぱい連盟からの献花とメッセージが捧げられた。

このあと、日本山岳会とも馴染み深い安曇村長、福島清毅氏が、来賓を代表して祝辞を述べられ、祝電の披露があつてこの催しも終りに近づいた。最後に、本会の山崎安治評議員が、本日の歌の発表を待たれながら、前日の六月二日に逝去された「ウエストン祭の歌」の作詞者、本会会員岡村精一氏と、アンナブルナで遭難死された信濃支部アンナブルナ隊員諸氏の願福を祈って黙祷を提案され全員で黙祷した。



その頃、ウエストン祭も最高潮となり、今回発表される「ウエストン祭の歌」の譜面が、坂倉登喜子さんによってレリーフに献呈され、続いてその発表が始まった。平野修氏の指揮によりエーデルワイス・クラブのフラウエン・コールによる歌声が梓川の谷間に響き、譜面を持った参加者もその声を合わせる。エーデルワイス・クラブの歌声ももうウエストン祭に欠かすことのできないものとなったが、今年は、新曲の発表もあり、気持のよい青空の下、二十人あまりのメンバーはほんとうに一生涯命唱った。(写真)

第二十七回ウエストン祭(会報三三
五号に二十六回とあるのは誤まり)は
盛況裏に終り、中屋副会長、日高信六
郎、佐藤久一郎、石原憲治氏らの長老
も御満足そうであった。

もう一つのウエストン祭

熊本支部春季総会報告

五月十九、二十日宮崎県西臼杵郡高
千穂町で行なつた。参加者はわずかに
九名であったが、大分県竹田市や福岡県
大牟田市から会員の参加があった。総
会は十九日午後六時から民宿「四皇子」
で開き、地元高千穂の会員佐藤、石井
両氏の心づくしの郷土料理に米焼酎
「祖母錦」を飲みかわし、神話と伝説
に富んだ御当地の観光映画を観賞して
夜おそくまで語らつた。なお、

この総会で支部費年額五〇〇円に増
額を決めたほか、今夏八月九、十日阿
蘇で行なわれる第十五回自然公園大会
への参加および前日の八日に九州三支
部の合同懇談会を開くことなどを決め
た。

翌日は午前八時より天岩戸神社、高
千穂峽など観光地を見物して祖母山麓
の三秀台へ行き、ここにあるウエスト
ン碑の前にたずみ、遠くウエストン
が初めて中部山岳に足を入れた前年祖
母を訪れたという当時は想い浮べて下
山解散した。

このウエストン碑について少しふれ
てみると、すでに御承知の方もあろう
と思うが、昭和四十四年十一月高千穂
町議会が祖母山の国定公園記念行事の
一つとして広く地元有志の方から募金
して建立したものであり、鐘がつるし
てあるが、この鐘は当初計画してあつ
たが昨年秋季に地元北稜山岳会の手で同
じく浄財をもって取付けられた。祖母
山を真近にのぞみ、九重山、阿蘇根子
岳が一望のうちに見える小高い草原の

丘にあつて、熊本、大分との県境もほ
ど近い。

ちなみにこの碑に記してある矢津田
鷹太郎翁日記の文章から察して明治二
十三年十一月六日の記事があまりに短
くて、これだけでウエストンの祖母登
山の全容を知ることではできない。また、
他に我々の知るところ当時は伝える文
献が地元になくて、——何とか調べる
ことができれば幸いであるが、今のと
ころ地元会員の方の話によればないう
である。

再び山日記をめぐる

若い愛読者との話し合い

一月三十日に行なつた、若手ではな
い山日記愛読者の会に続くものとし
て、今回は若手を中心として、現在も
なお山行に多くの時間を使っている人
々に集まっていたいて御意見を伺ひ
ました。以下御意見を項目別にして個
条書きにしてみました。

分冊することについて 我々は学生時
代には、下級生に対しては必ず山日記
を持参するように指導してきた。応急
処置などいくつか役に立つ記事が出て
いたからである。内容は必要最少限の
ものを厳密に区別した上で分冊という
ことも考えられる。重量軽減というこ
ともそれによって出来る。今の山日記
は性格が曖昧である。実用本位でもな
いし、読み物的でもないし、参考資料
でもない中途半端なところに留まらな
い。実用本位、即ち使用してもらう
ことを考えるのなら、分冊でもいい、
日記欄の充実を考えて、それに必要最
少限の記事を入れて、軽くて実用本位
の山日記を追及して欲しい。

——これ位の重さは苦にならない。
そんな事を気にするよりも、むしろ楽
しく読めて実用的であるという山日記
であつて欲しい。

碑文の全文を記して許してもら
うが、ウエストンはこの日友人シヨ
ンランドラン氏と二人で現高千穂町河内
から往復五ヶ所を経て祖母山に登山、
五ヶ所所て庄屋をしていた矢津田鷹太
郎宅に立寄っていた。

この問題についていえば、そういう標
識は共通なものではなくて、自衛隊と民
間の場合ではサインが違ふので、日本
山岳会ならば、ヘリに對する標識なり
サインを決めて、外に連絡しておくこ
とが必要になるだろう。

せないで、山に登る人間に必要なもの
を分り易くまとめたものでよい。
ピーアール 宣伝不足のために店員が
知らない店が多い。山日記をおいて
いない店が多い。もう少しピーアール
をやつて普及をはかることを考えてい
いと思う。

製作について 例えば行程表など余白
が多すぎる。もっと図を大きく出来る。
日記欄にしても小さいスペースに無駄
があるし、インキの色も濃すぎる。も
う少し細かい神経を使つて欲しい。

巻頭言 かつて自然保護について松方
さんらが書いておられたが、ああいう
形で山登りというものの對する考えを
述べる頁があつてもいいのではない
か。その年、その時点での登山にか
かわる問題がある場合には、そういう文
章があつていいし、それが長い目でみ
て歴史的な文章となることがある。

装幀 かつて一つ一つの重量が記され
ていたことがあるが、便利であつた。
製品が多くなり、メーカーのものによ
り重量が異なりする場合もあるが、
例えば新しいエア・マットの重さが書
いてあると、自分の使つていたものと
軽いものができたことに気がつくとい
うことがある。特にルックサックなど
最近随分替つてきている。

山日記編集委員会としては以上の二回
行なわれまして「山日記の会」の場
で出された御意見を十分に検討し参考
になるものは、実際に山日記のなかに活
用してゆきたいと考えて、既に三回編
集会をもちましたが、今年度の方針は
大体的なようなものとして進めてゆき
たいと考えています。

分冊にして実用本位のものと記事と
の区別をつけるということについて
は、その方がすすりできるというこ
とがあるけれども、そのための準備に
は充分な時間が必要であるということ
以上に、山日記の独自性というのは、
実用性と記事と二本立てが不即不離の
関係にあつて、それぞれを一冊の本の
中で生かしてきたものであるという視
点に立つて、少なくとも今年度は従来
通りのスタイルを守ることにした。

毎年同じ内容だということに対して
は、正確ということをもっとウにして
やつてゆきたい。

遭難対策 今の記事はグループ登山者
に適しているが、個人山行には向いて
いない。ヘリコプター利用のことも書
いてあるが、実際にはヘリコプターが
飛んでくても、なかなか我々が気がつ
かず、我々も彼らに気がつかせる手段
をみつめあぐねるということがあつ
た。ヘリコプターへの合図方法とか、
着陸の際に遭難者側のなすべきことだ
とか具体的に書いてあれば役に立つ。

必要ない。こういうものではなくし
て値段を下げてもらった方がよい。
山小屋案内 もう少し厳選して頁数を
減らしてもよいのではないか。

減らさなくてもいいと思う役に立
っている。行程表と合せ併用して計画
を立てることがスムーズに出来るので
ガイドブックがいらない。

行程表 北海道では十勝・大雪以外に
日高、利尻が欲しい。その他に奥多摩、
九州があつてもいい。

登山規制条例 条例全文をそのままの

また頁が少ない山日記で充実したも
のを求めるのと、何年かにわたる
シリーズ記事をこれからも採用してゆ
きたい。(松丸秀夫)

また頁が少ない山日記で充実したも
のを求めるのと、何年かにわたる
シリーズ記事をこれからも採用してゆ
きたい。(松丸秀夫)

また頁が少ない山日記で充実したも
のを求めるのと、何年かにわたる
シリーズ記事をこれからも採用してゆ
きたい。(松丸秀夫)

また頁が少ない山日記で充実したも
のを求めるのと、何年かにわたる
シリーズ記事をこれからも採用してゆ
きたい。(松丸秀夫)

また頁が少ない山日記で充実したも
のを求めるのと、何年かにわたる
シリーズ記事をこれからも採用してゆ
きたい。(松丸秀夫)

昭和48年3月31日



春日石

追悼

ふたつのあいさつ状

小野 幸

いつのほどよりか一期一会を心として、自然と人に接して来ましたが、病弱だった少年の頃には想像もしなかった長い歳月を過ごしました。回想すればまことに無常なたへぬことばかりですが、総ては好きな山行と山を描くことに専念した楽しい生涯でした。

恒に荘麗な自然と尋知皆様の御交誼と御芳情に因るものと深く感謝して居ります。崇巖をばこる岩峰も日毎に落石を走らせ、峻烈な水河も年毎に退嬰する自然の粗を教へて呉れました。私も愈々還元される時が参りました。皆様の御情福と御自愛を祈りつ、左様ならと申し上げます。有難う御座いました。

足立源一郎

幸

四月のはじめでありました。足立源一郎先生の息、朗さんから一通の角封書をいただきました。朗君にはずっとお会いしていませんが、活字の住所氏名なので、何か解(げ)せない気持ちでひらいて見ますと、源一郎先生の御逝去の通知でしたのでまったくおどろきました。数日前にお病氣見舞をさしあげたばかりでした。それに悲しみを増したことは、この状に先生の遺書が同封されていたことでもあります。

その中には「総ては好きな山行と山を描くことに専念した楽しい生涯でした。」とあります。奈良生活時代からずっと知っておられた、故中沢弘光さんも、わたしに足立さんは旅行が好きです。すよね、といつも語っておりました。「私も愈々還元される時が参りました。皆様の御情福と御自愛を祈りつつ左様ならと申し上げます。有難う御座いました。」とむすばれております。そして先生の愛用の印だったものでしょう。齊白石の刻した「源山中人」がござれてありました。早速お電話申しました。朗君が出られたので、おくやまのいろいろの話をいたしました。遺書のことにつきましてもおききたら、先生が十年ほど前に記されたもので、特によばれて渡されたものだとのこと。ではスキーだけがござれた頃でしょうか、とうかがいましたら、その前ですよ、とのことでありました。

足立先生がなくなられたのが、三月三十一日でありましたが、その半月ほど前の三月十七日には石井鶴三先生がなくなられております。両先生ともわたしにとりましては山は勿論、人生の大先輩として、おつきあい願っております。お二方は絵の方は春陽会の大先輩同志でもありました。この石井先生の告別式には参列者へのあいさつ状は歌一首とそのカットでありました。



みちのへにさく やまざくら きよらかに
うつくしき かな うま とどめ みる

これにカットの添図は馬上の少年のすがたの先生が花をあおぎ見ているもので、一枚のはがきとなっております。「御多用中遠路難々」式のものでないことは先生のお氣持をご存知のお家の方や会の皆さんの考えであつたのでありましょう。この歌ははからずもわたしたちの同人誌「行楽」昭和四十五年四月号によせられたカットとお歌の一冊であります。題は山桜で、副題として「馬上観桜(明治三十六年)」とありますので、先生の十七才ころの作と存じます。なお、そのとなりは「さきはな あかき わかはな」を「まじへ さく やまざくら はげに きよら なる かな」とあります。石井先生に接して「きよらなるかな」の感をいだかれた方は多かったと存じます。この「きよら」という言葉は先生ご自身もおすぎなもののひとつであつたのではないのでしょうか。ひごろ先生に接していたわたしはそうとばかり思えてなりません。(四八・六・三)

山と植物に生きた山下先生

坂倉 登喜子

日本山岳会の先輩渡辺公平氏と故山下先生とは、学校が同じ早稲田でもあり、兵隊仲間でもあったところから、親友だったことは、よく昔話で聞かされたことがあった。

あんなにお酒が好きだった山下先生が渡辺氏とは兵隊時代お酒を飲まない同志で、仲良しになったかと、とても信じられない話だった。渡辺氏はハムちゃん、山下先生をピンちゃんとお互に呼ぶ間柄で親しいことを知ったのは、私が交通公社へ入社した昭和二十一年、二十二年には山下先生の紹介で日本山岳会に入会以来二十六年間、交通公社では上司として、山岳会では先輩として、エーデルワイス・クラブでは植物の先生として御指導いただいた永い年月、私たちへのバックアップと、そのお力添えは、公私共に計り知れない大きなものとなつていった。

いつも山へ行つて、「この花は何ですか」「この赤い実は何の実ですか」と聞かされたに、正確に厳しく教えて下さった山下先生の声は、もう永遠に聞けないやうなうそのよう、どこかその辺の草かげで珍らしい花を見つけて、スケッチしていらつしやるののではないかと、ふと元氣そう笑顔が突然飛び出してくるのではないかと……、と思うほど亡くなられたのは信じられない氣がする。

昔は渡辺氏たちとの山行が多かつたようだが、昭和三十五年頃から、山とお酒が同じ位好きなグループ四人会が自然に生まれ、今井夫妻と共に過去十三年間、「秘境を探索する山旅」が続いて、山を味わう旅の思い出はつきないが、去年の六月、新緑の梶山新湯へ行つたのが、四人会の最後の山行となつた。

今では良き山仲間を失なつたなげきを、今井夫妻と共に、山を歩き、花を見る度にしみじみと感じさせられている。

日本山岳会に入会されて四十八年、近く永年会員になれる筈だった山下先生は、土曜会のメンバーで、故足立先生や藤島氏その他の皆さんと、ワイスキーを飲みながら、いつものたしそのうに話し合つておられたが、病氣が一時回復されてお酒が飲めなくなつてからも、土曜会の雰囲気をつたうに行かれたほどであった。日本山岳会では監事役員だったので、病氣中氣にかけて申訳ないが最後まで心配されていた。病氣前には茗溪堂から出版した足立先生他数冊の本の編集に熱中され、一向に御自分の本を作ろうとなさらず、花の本を、おすめしめて、「いやまだその気になれないよ……」とおっしゃるばかり、先日おくやみに自宅へ伺つた時、奥様から今まで書いた

画文を集めて、茗溪堂から出版するという話もある旨を伺い、やっと先生の本が出来るのかと皆で喜び合った。併し今となって見れば、なぜ余世を絵でも描いてのんびり楽しめなかったのだろうか、とくやまれでならない。

山下先生は気が短かくて、せっちなによくまああんなに細かい花の絵をお描きになったものかと、いつも感心していたが、山日記には幾度も高山植物を書かれたり、年賀状や色紙に花の絵を書いて私たちが喜ばせて下さって、真底から野草や高山植物への愛情がこめられていたようであった。

また反面感激で、シャレがお上手で皆を笑わせたり、お酒を飲んでごきげんになると、お父さんから教わったという、越後の俚謡「角兵衛獅子」の歌を、とても情緒たふりて聞かせて下さった。山では気分が良いと足が早いので、先頭の方から「帰れソレントへ」の歌声が、朗々と響いてきたことも忘れられない。

かつて若い頃は南アルプスが大好きで、三省堂からガイドブックを発刊されたこともある。高山植物の腊葉がトラックに一台分位残されていて、やがて母校へ寄附されるのか……

最近はお庭に野草を植えて、春が来る毎に植物の話を楽しそうになさっていた。

三月初め再入院されてから今井さんとシムランの花を持ってお見舞に行ったが、もう山の花を見る気力もなく、四月に入ってしまった時は、二人の顔を見て呼びとめ「すまないな」の一言が最後であった。

去年の十月クラブ会員たちと信州峠から黒森鉱へ行った時はお元気だったのに……。その後不眠症がこうじて体力に自信を失ない、ノイローゼによる余病の併発で長逝された。

これからは四季折折に山に花が咲く限り、山下先生のみ魂よ安かれと祈り続ける私たちの祈りである。

城山正三さんを追悼して

木村 義 昌

城山さんは去る一月二十三日、春を待たず六九才の生涯をこたえられた。昨夏高血圧で入院され、秋以来自宅で静養中であつた。頑健といつてよい位健康で、体力には大変自信をもたれていた。知人の間から万青年といわれたほど若く、年齢を感じさせない元気を保つていられた。戦後の登山としては、立山、赤石山脈、奥日光、東京西郊の低山へかけておられた。戦前は台湾、朝鮮のほか、樺太、北千島のバラムシル島の山、カムチャッカ半島のペトロパロフスク、オゼルナヤなどに足跡を止められた。昭和一七・一八の兩年には、城山さんが最大の情熱を傾けられた企である白頭山への登山を試みられた。

晩年は血圧が高かったで家の方もよく注意をされていたが、家人の言葉をよそに夜おそくまで調べごとや仕事に専念し、無理を重ねたのがよくなかつたようであつた。城山さんは日本民衆産業という、海洋調査器材、調査船や遠洋漁業用装備をあつた会社をやつておられたが、業務の利益は広く民衆へ還元するという理想をもち、このよな社名をつけたらしいのだ。昨年夏の暑い日川崎市の病院内にお見舞に伺った折、見送りに外まででられ、ふだんと違わぬいくらか元氣な様子であつたので、おしらせを受け、忽然逝つてしまわれたという感じがした。

平均寿命が大幅に延びている現在、まだ直接おかつた次第である。

直接おかつた次第である。昭和二四年頃か、当時水産大学在学中だった西丸震哉君と、彼の先輩である

城山さんを日本橋近くにあつた会社へお尋ねしてからであるが、お名前はずっとはよく知られていた。といううのは昭和七年頃だったか、創刊間もない山と溪谷誌上に城山さんの北洋紀行が掲載され、それを印象つよく読んだからで、雪をかぶった千島やソ連領の山の話、高緯度の海辺に咲く高山植物など、霧深い夏の北洋風物を述べられたルポであつた。

城山さんは越中島にあつた水産講習所、現在の東京水産大学遠洋漁業科を卒業研究室にのこつておられ、毎年五月頃から三四月月学校の実習船、エンジン付の帆船雲鷹丸に乗組まれ、オホーツク海、ベーリング海の海洋調査、漁労実習、操船教育にでかけていた。

きびしい寒流の海、いく日でも晴れない冷霧や耳もとではえ続ける激しい風にもまれた後で眺める荒削りの北洋の自然美にひきつけられていった。仲間か全容をみせないカムチャッカの最高峰クリチエフスカヤ（四九一七m）を洋上から仰ぎ、凍える指でシャッターをおし、昼夜休みなない網起こしや時々の苦しみを忘れさせた感激を聞いたことがあつた。

研究室から父君経営の日本漁網船具に這入り、台湾在勤中は中央山脈の主要峰を登移し、十五年朝鮮漁網の新設で京城に移り、大戦中白頭山の登行隊を組織し隊長として神祕の山へおむす。報告は一八年末に「発行・白頭山特輯」と、戦時色の内容を改め四五五年に出版された「秘境白頭山天池」に詳しい。これは千部つくられたうち約百部が海外から購入注文があつたとお話を聞いている。別名の長白山は、永久に白い神聖な山として、女真族にあらがれてきたこの山一帯について

の史実的研究を最近進められていたが、完成できなかったのは惜しいことである。城山さんはすごされたかの地

に大変愛着をもたれていた。旧知の人に頼まれ、禿山へ蒔いて貰う種子をあつめに病気になる前はよく秋のおわりに尋ねてみられた。筆者の住いの付近は、いくらか野趣のこころ多摩丘陵のはずれであるので、種子をさがしに一緒に行ったり、あつて差上げたりしたこともあつた。このことでもえられたのは昨年の一月九日が最後であつた。

海技資格者の城山さんは、昭和一九年陸軍船舶部隊へ召集され、一三〇〇トンほどの船の船長として、危険な海上輸送に従事され、幾度か死線を突破された。丁度字品に入港されたとき、広島への原爆投下があり、全乗組員で救助作業に努められた。城山さんの登山は、ナチュラリスト的なところを多分にもつたもので、これを探究登山といつていた。贈つてくれた著書に、アライソの峠に咲きそう高嶺草という句が書かれてあつた。このんだ歌として、次のような雲鷹丸記念歌がある。

「それ北洋の夏の航海
雪はかゝれリスタノボイ
将や輝く海の幸
聞きし勲功は幾何ぞ
極光のもとに何時か又
嗚呼燃えたゝん郷愁……」

昭和二十九年以降日本極地研究会を代表して、なにかと尽力を頂いた。北洋の自然、東アジアの名峰に心ひかれ永い間それらにうちこまれた城山さんのご冥福を祈る次第である。

註 雲鷹丸記念歌の歌詞は、東海区水産研究所の奈須敬二氏のご教示を頂いた。

白石勝教さん近く

貝 森 健 治

福島県の山仲間にはカッサンの名で親しまれていた白石さんが「ヒマラ

ヤヘイキングに行きます」と言つて、二月十日早朝羽田を出発していった。それが十九日、ネパールのベリチエで、雪の中での転落によるのか、高山病によるのか原因不明のまま、永眠されてしまった。

何しろ体重〇・一二トンあるという堂々たる体格であるが、気はやさしく誰とでもすぐ親しくなれる特別の性質の持主だった。日本山岳会に入会したのが、一九六六年で会員番号六〇五〇であるから、すぐ古い会員ではない。私と白石さんの出会いには南会津山の会の会合で、只見川沿いの玉梨温泉が最初だった。何しろ自宅の阿武隈山中大越町から玉梨まで、オートバイで延々四時間もかかたという白石さんは、大きな体に似ずやさしく朗らかに、すぐ打ち解けてしまった。

一時、大越町役場に勤めていたが、それでは山に行けないと辞めて、自宅の寿司、割烹、焼鳥の仕事をやりながら、暇を作つては山へばかり登つて、まったく羨ましくてしょうがなかつた。昭和四十六年八月、白石さん宅を訪ね、二人で付近の低山を歩いた。夜中に大滝根山に登り、盛り上った太平洋からのcome光は圧巻だった。

やりたいといつていた阿武隈の本の出版が完成できず、それだけが白石さんの唯一の心残りではないかと思う。ご冥福を祈ります。

おわび 前号八頁の昭和四十八年度通常委員会出席者名に、高遠宏、清水悟郎、名見耶達男の三氏のお名前が脱落しておりましたので、三氏に御不快をおかけしましたことをおわび致します。

また前号一頁の「山岳図書を語る夕べ」の原稿には署名がありませんでしたが、図書委員の大森久雄氏が記録してまとめたものです。

会
員
通
信

長須ヶ玉山と台倉高山

去る五月四日、松枝岐から舟岐川の支流左惣沢をつめて長須ケ玉山（チヌウサガヤマと読む）へ登った。高曇り之余り日は射さなかったが、山頂の立枯れの疎林帯から、燐ケ岳、南方の至仏、会津駒平ヶ岳から遠く魚沼岳、中ノ岳、荒沢岳まで眺めることができた。

翌五日は大中子山へ登る予定だったが、今年は非常な寒害で、これでは五月の堅雪の愉しみが減殺されそのなほで、少しでも雪の多そうな台倉高山へ、目標を變更、舟岐川の林道を越ノ沢の出合付近まで自動車でゆき、越ノ沢堅雪をつたって尾根にとりつき、東峰を経て山頂に達した。残雪はよくしまり、樹林もまばらで歩きよく、その上前日と異つて五月の陽光がサンサンとふりそそぐ好晴に恵まれたのだから、文句のつけようはなく、山頂からの展望の素晴らしかったのは言うまでもない。しかも尾瀬や津淵駒はかななり混み合っているらしかつたが、こんな山に登る輩は昨日の長閑ケ玉と同様、殆んどないといふえて、二日共全く登山者の姿は見けなかつた。

二晩厄介になった桧枝岐の丸屋をひき払い、五日は駒止峠下の山口まで行って山口屋という旅籠へ泊ったが、タラノメの天プラやコゴミ、ワラビ等を食べさせてくれたのは、思いがけなかっただけに嬉しかった。

同行者は藤島敏男、成瀬岩雄、山田哲郎氏のほか会員外三名。（望月達夫）

山とパイプと地酒の味

パイプの新管火入れは、よく晴れた山の頂上をえらんで四囲の嶺嶺を眺めながらゆっくりやるものだ——とは先

輩の発案実行するところ。私もこの名案を聞いてからはこれにならうこととした。

友人が海外旅行の途次シエルの小型パイプを探してきてくれた。これは山頂火入れの第一とせねばならぬ。私はたかく奥秩代に登る度合が多いが、山に魅せられたはじまりも一九三四年八月中旬の雲取山頂であった。そこでこの第一号は一九七一年七月十九日に雲取山の頂で火を入れた。まわりの花火畑はやや咲きそめており、かなたに南アルプスの連嶺が眺められた。翌年正月一日には先輩とともに長野県下伊那郡の鬼面山に登る。小型の新管CHACOM SPORT-1008をリッパにしておさめた。あいにく頂上では小雪に見舞われて眺望がなかったが、お元日のことでもありも一度来たる山ではないので、ここで火入式を執行した。そのとき撮ったスナップ写真をみると、結構うれしそうなのが横顔がつっていた。

こんな具合で何本かの新管はすべて山頂で火を入れた。高価なパイプなど買ふ余裕はないし興味もない。安いパイプで火が入った型なら充分満足できる。山行で班がついてもの惜しいこともなく、かえって想い出の種となって愛着の念がまとわりつく。そのうちにこれはシャコムだ、やれオリックだと呼ぶよりも、火入れをした山の名をバリエの愛称にするのが良いと思いついた。雲取山・鬼面山・雲取山二十五回目・苗場山・御岳（別称に中乗さん）という愛称ができて、それをくわえるたびに火入れをしたときの山行が目につくかぶ。すでに自宅で火入れずみであつた古パイプは、それが初めて登つた山名の明らかなものについて仙丈・秩父御岳と名付けた。仙丈ヶ岳いいよなつかしである。

こんなことをやって悦に入っている

うちに、パイプの愛称と地酒の組み合わせに想いが及んだ。先輩は山行にかならずウイスキーを持参するのであるが、私はとかく地酒にひかれる。長女の学友（岳友でもある）に新潟県中魚沼郡津南町のお嬢さんがあって家は醸造業であるが、お酒の銘柄がなんと「苗場山」である。頂戴して飲んでみたらやや辛口でおいしい。わがパイプ苗場山は水源をひとくする地酒「苗場山」と組み合うことばかりである。ところでさきに仙丈の帰りに伊那駅の売店で買った地酒が「仙醸」だった。これには不思議な因縁がある。「仙醸」は高遠で醸造されているお酒であるが、私の戦友だった黒河内さんが醸造元であり、高遠一戸家の間に黒河内という地名もあるほどの旧家の造るお酒であることが判った。仙醸はもとより仙丈にちなむのですとは、あのとき偶然にも伊那駅で列車に乗りこんでバツタリ私と出遭った御本人から聞いたことである。パイプ仙丈はこゝで地酒仙醸」と組み合せて、仙丈追想の芳香い

若者よ、頑張れ

平素は御無沙汰ばかりしていましたが、小生も七十七才ですが体力だけは四十台といわれ、身体の柔軟性や血圧は二十台とのもので、スキーマで、自分は現役と一緒に山もスキーもやれそうです。

昨年のマッターホルンで味を覚えたので、小遣金をためて三、四年したでマッターホルンとモンテローザを登って見たらと思ひ、昨年は言葉で苦労したので目下ドイツ語の勉強をやっていますが、恍惚の人になりかけたと思ひ、記憶力が若い頃のようにいかないのが残念です。皆様の御健康と御活躍を祈ります。（松村 高）

若者よ、頑張れ

平素は御無沙汰ばかりしています。小生も七十七才ですが体力だけは四十台といわれ、身体の柔軟性や血圧は二十台とのことです。で、当分は現役と一緒に山もスキもやれそうです。

昨夕のマッターホルンで味を覚えてたので、小遣錢をためて三、四年したマッターホルンとモンテローザを登つて見たらと思ひ、昨年は言葉で苦勞したので目下ドイツ語の勉強をやつていますが、恍惚の人になりにかたと見え、記憶力が若い頃のようにいかないのが残念です。皆様の御健康と御活躍を祈ります。(松村 高)

太平洋から塩見岳が見える

よいよ尽くることがない。
今年の四月上旬濁河温泉より御岳に登って木曾駒を眺めてつ新管火入れもすむ、王濱経由で木曾福島にわたる。御岳の稜線で晴れわたった春山を満喫したあとと品奮いまださめやらぬとき、駅売店で地酒「中乗さん」と「七笑」を買った。「中乗さん」がやや辛口で私にはおいしかつて。木曾はやはり中乗さんである。そこでパイプ御岳は別名を「中乗さん」ということにして、地酒「中乗さん」とコンビになった。こうなるとあまり人混みしないときを狙って白馬へ登らなくてはなるまいと思う。地酒「白馬錦」はおいしかつた。どこかで型の良い安いパイプを求めねばなるまい。ああ世話のやけることである（柿原謙一）

南アの塩見岳の山名に就いては①麓の鹿塩部落の採塩の煙が見えるから、②煙は見えぬが鹿塩部落が見えるから、との説が一般的で、私も塩見山名考にはこの説をとっている。山岳雜誌に山名考を書いたら、雑誌社を通じ、豊橋市在住の谷山功と言う方から、八〇〇ミリ望遠レンズでとった南アの写真と共に一文を頂戴した。同氏の居住する豊橋市神野新田は三河湾の干拓地である。冬期には聖、赤石、荒川が良く見え、左方に塩見が独立して見える、との事である。頂戴したカラー写真には残念ながら塩見は写っていない。当日がガスがかかった見えなかったと手紙に書かれてあった。

太平洋の汐が見えるので塩見岳と言
うのであらう、と同氏の御意見である。
太平洋が見えるので、亦是塩見が太平
洋から見えるので、とは全然異つた事
柄であり、塩見岳の名に關しては、両
者は何等の關連がない。と言ふのは、
太平洋から塩見が見えるからと言つ

て、必ずしも塩見岳の名の起りたり得ない。この論から言えば、見える荒川赤石、聖も塩見岳と呼ぶことが出来る。当然、塩見の山頂か、その近くで太平洋が遠望されねばならない。

塩見山頂から太平洋が見えるのは、季節的、時間的、天候的にごく限られた季節の限られた時間帯と考えられる。では、塩見岳と名の無かつた頃、誰が冬期に登山して名付けたのであろうか、と言う単純な疑問が出て来る。槍岳登山したお上人様のような言伝へも古文書の有ることも、浅学の私は聞いた事がない。これはぜひ、地元の長野県の方々にお調べ願いたいことである。槍岳登山のお上人様も夏期で、厳冬の話ではない。厳冬期登山と言へば大正時代の富士山位のもので、装束食料の点から考えて、塩見岳の名を仮託りに明治の終りか、大正の初めと考えても、厳冬期登山にして塩見岳命名した登山者はいないのであるまいか。

日本山岳会が創立以来六十年ほどにならず、大先輩の方々にあたずねした事が無いので判らないが、日本山岳会の元老クラスの大先輩も既に、当時から塩見岳の山名を使っていた事は、明治時代から塩見の名があったと推測して良いと思う。

このように考えると、豊橋から塩見が見えるから「塩見」から太平洋が見えるはず「塩見岳」とは無理な説と思える。この説の成り立つには明治が大正の初期に厳冬期に塩見に登山して、太平洋を確認した人がいなくてはならぬ。夏のほんとうにぐまれた時間に、キラキラと輝く太平洋が望遠されたかも知れない。山頂近くでビヴァークしても知れない前に太平洋を認めたのかも知れない。然し乍ら、このような推測は、太平洋から塩見が見えると云うことを出発点とする強引な假説と考えた方が良さそうである。

以上のようなわけで、私は、やはり鹿塩部落の近くで、塩見が見え、また見下されるから、との一般説をとる。然しながら太平洋から塩見が遠望される事を知ったのは驚きである。浅学を開いてくれた同氏にお礼を申し上げる。(山本明三郎)

雲の彼方に

“山と雲と蕃人と”の著者

会報四十八年四月号で、先輩鹿野忠雄氏のことを読ませていただいた者ですが、私は鹿野氏の著書「山と雲と蕃人と」を通じて、鹿野氏とは一体どのようなお方であろうかと考えながら、それを知る機会がなかつた今日に到ったのです。しかし同氏がいつの間にか(私にとっては全くいつの間にか、といった感じでした)他界された、もうこの世にはおられないということは何かわかっておりました。私も戦争時たけなわの昭和十八年の夏、所用で渡台しましたが、渡台したからには是非とも新高の山頂を踏もうとの、かねてからの念願を実行に移しました。新高への登行には当時も入審許可が必要で、その条件は単独行では許されず、最低三人が一組とのこと。幸い阿里山の宿で、やはり新高をめざして作った中学の先生お二人と一緒に、ようやくその資格を得たのも懐しい思い出です。阿里山の宿を早朝に立出、その夜は新高下の駐在所(山小屋)へ泊り、翌朝、新高主山の山頂に立ち、東方はるかに秀姑巒山、マボラス山を望み、山と雲と蕃人と”の著者である鹿野氏の足跡に思いを馳せた記憶があります。前記した通り、戦後になり同氏は他界されていることを知ったのですが、まだそんなお齢でもなさそうですが、病気で亡くなられたとも思われず、何が原因で亡くなられたのか、と。一面識もない私ですが、同氏のことは奇妙にも脳

裡から舐かされず時折思い出しいた次第です。考えて見れば戦争は幾多の人々の貴重な生命を失わしめたものですが、同氏もまたそのために亡くなられたことは迂闊にも思い到りませんでした。また、鹿野氏がそれ程までに台湾の山々に愛着をもたれ、特異な存在であられたことも全く知りませんでした。が、著書を通じて同氏には何か強くひかれるものがありました。惜しい人を亡くしたのだと思っております。

春田俊郎氏が寄稿された「スーパーマン鹿野忠雄」の中での「同氏が身に蕃衣をまとい裸足で未開の山野を駆け廻っていた」など、氏の人となりの片鱗を知るに足るものがあります。それにしてもアイガバンドへ取りつき、日の丸の旗などを振りまわして、グリンデルワルトの望遠鏡族のサーピスをしている、まことに賢い日本の山屋(やまや)があったことを、いつぞやの新聞が報じていましたが、その後もますますこれ式の山屋のみが急増しているとの見るのは私のひがめか。使い古された言葉ですが、このような輩など鹿野氏のごとき山人の爪の垢でも煎じて飲まれたら……と思うこと頻ります。(内山正二郎)

大井川の語源に就いて

大井川の文字が初めて顧われたのは、仁徳天皇六年(三七五年)、日本書紀に次の様に記されている。

『夏五月、遠江国司表上言、有大樹自大井河流之、停于河曲。其大十圍、本一以來向、時遭倭直吾子龍、令造船、而自南海運之、將來千難波津、以宛御船也。』

この大井川は古代文化に於て日本の東西の大きな境界線であった。弥生式土器の分類でも東西の境界線であるとの事である。或いは考古学上の一つの謎とされている、銅鐸についても、大

井川を挟んで以西からは沢山、出土しているが、以東からはほとんど出土していない。言語学的に大井川の存在を考えてみる時、明治三十六年の国語調査委員会の調査で設定した方言境界線でもある。(参考、見ると言う関西弁と、見よ、見いと言う関西弁との境界線)

大井川上流は南アルプスの山が重なり合っている人の往来を阻んでいた。古代の海岸線は現代の丘陵のすそを洗っており、今日の陸地の海底が、大井川の河原であったであろう。大井川の流は牧ノ原の洪積台地に突当り、東に屈折して左岸地域(駿河川)を洪水地帯としていたであろう。この駿河は「駿国雑記」によれば、

「大河一國に縦横して村落続かず、民州中に在て産業するが如し、故に号して洲河の国といひしを、中頃より訛て、すがとも言ひ、須流加とも言ひ、須加波とも言ひ、須流加とも言ひたりしを、和銅六年(七三三年)五月、勅ありしにより、文字の意義愛で度とて、駿河の二字に定められた」とある様に、洲の寄つて出来た国と言う意味である。斯様に、大井川の右岸は洪水地帯であり、青島、島田、大津、瀬戸など水に關係する地名が現存しているのでも判る。

出水毎に大井川の流れの変わるのと、洲が出来たり消えたりする地域が広範囲であったと思われるので、京都の桂川の奔流をおさえ、桂川の別名の「大堰川」を作った婦人の治水工事で大井川には手が出なかつたと思われる。大井川左岸の初倉村敬満神社は秦氏の先祖も祭つてあることは「神名帳考証」に明らかである。孝謙天皇の頃(七五〇年頃)新羅からの数百年の婦人の一部が此の地方に配置された。初倉

秦の倉の意味である。彼等、朝鮮系の人達は土木・農耕・機械等の技術に秀でていたであろうから単に大井川の流水を汲んで用を足さず、駿河川の

大井川右岸の堆積平野、或いは河原に簡単な秦井をして水を得たであろう。また、あちこちに大井川の伏流が縦横に走っているのを井戸もたやすく得られた事と思う。すぐれた技術を持った秦氏一族の定住と、大井川の豊富な表土近くの伏流が井戸をたやすく得られた要因と考える。

大井川とは、多井川井戸がたやすく得られる地帯である川でも言うものと考えられる。多井川は、大きいとか多くあると言う意味でなく、たやすく伏流が利用される、と言った意味と、数が多い、とが入り混って、多井川が文字の美しさから、多を大にかえて、大井川となったものと考えられる。

大井川上流の井川は大井川の名称とは、發生的に異なるもので、井川は猪が多い山奥の地であるので猪の多い川のある地点、として猪川の名が起き、下流の大井川に混同され発音が同じなもので井川と言うようになったものである。(山本明三郎)

ビール・パーティへの御招待

婦人懇談会主催による恒例のビール・パーティが次のように開催されます。お誘い合わせの上、氣楽に御参集下さい。

日時 七月二十一日(土) 午後四時から
場所 本会ルーム
会費 五〇〇円(ビールの方) 三〇〇円(ジュースの方)
【実費で追加できます】
申込みは本会事務所まで

九山忌

深田久弥氏が茅ヶ岳で急逝されたのは、昭和四十六年三月二十一日、今年のその日に深田さんのふるさと加賀の大聖寺町のはつしほ句会(この会は深田久弥氏の発起で創立されたもの)では第二十四回山忌を迎え、有縁の人々三十四名相集い、読経ありて後、各自額づき、その御冥福を祈る。深田さんの福井中学校時代の同級生西村治氏、丸岡から参加。島仁で句会。還者伊藤柏翠、川本清嗣、杉本升女、室生勸川の四氏。東京の川崎斗城(精雄)氏、深田志げ子さんからも句が寄せられた。兼題の数句を摘記する。

雲嶺の裾の裾なる春の山 川崎 斗城
名を呼べばこだまを返す春の山 深田志げ子
山に春ふたたびめぐりて九山忌 浅野たつき
彼岸会や即ち九山忌と記憶 福田りう子
彼岸会に九山・岬忌を重ね 岡田 利子
春の山煙を吐きて汽車止る 島 耕草
青丹よし奈良は春山めぐらせて 小坂 富子
父のみの父に従ひ春山に 山下 魚洞
東京から深田志げ子さんが参加された。なお席上、深田さんと親交深かった大聖寺町在住の稲坂謙三氏からふるさとに深田久弥文学碑建立の計画のある旨を話された。(山下久男)

支 部 だ よ り

東海支部の現況と昭和
四十八年度総会報告

中 世 古 隆 司

東海支部は昭和三十六年四月、愛知、岐阜、三重三県在住の山岳会々員の大多数の賛意を得て設立された。そして紆余曲折があったにしろ、アコンカグア南壁の完登、マカルー・東南稜の初登攀等、設立した意義は十分に発揮された。しかしマカルー遠征以後これといった大きな目標も無く、また一昔前とは社会も、登山界も大きく変った故か支部に顔を出す人も減り、また世話をする人もあまりいなくなってしまう。そして今回一時休会に持って行くという意見が出たのも止むを得ないものであった。

しかし、だからといって簡単に休会にするということとは、設立に努力した諸先輩に対して申し訳なく、またそれ以上に社会的信用の問題もある。それに、現在休会にもついてもいくのが、一番ベストな方法であると考えている者はあまり無く、委員の大半でさえ、ただ自分が積極的に行うことが出来ないからといった程度の考えである。それに一番大切なことは、今後また東海支部で活躍しようという人が何時現れるかも知れないこと等を考えると、今までのように盛んな活動は勿論できないが、時々会員が集まって話をしたり、一緒に山行をする程度で良いから、存続させようということになった。

しかし、今までのようにルームを持つ力も無いので、四月一杯で現在のルームを引き払い、一応連絡事務所を私の家に置くことにした。もともと東海支部は設立された当時、ルームは無く、連絡事務所を私の家に置いていた。それが昭和三十九年八月藤森さんの紹介

で、彼の勤務する水谷商店の一室を、集会日のみルームとして利用させてもらうことになり、四〇年四月、川本さんの経営する登山具店の二階に移り、昭和四十二年九月、原さんの好意で、原病院の地下の一室を提供され、ここに初めて専用のルームを持つことができた。毎週金曜日の集会日はもとより、平日でも顔を出す者も多く、名実ともにクラブらしい雰囲気になったのであった。

しかしマカルー遠征終了後、病院の改築にとまると、現在のルームに移り、そしてこれも四月一杯で引き払うことになり、また搬出しに属することになったわけである。同じ搬出しでも、設立当初のように意気にもえていた状態とは、おのずから差があるが、また以前のように発展して行くことを願わずにはいられない。なお今後支部の運営に参加しても良いという方がありましたら、何時でも私のほうへ連絡して下さい。

○昭和四十八年度通常総会
昭和四十八年四月一日 於 鶴舞公園
南勤労会館F4第二会議室

一、昭和四十七年度事業報告（別紙）
一、昭和四十七年度会計報告（別紙）
一、昭和四十八年度新役員

支部活動を継続するか、休会にするか決定してなかったで、新役員候補も、この時点では決定してなかった。しかし継続することにしたので、一応支部長、副支部長は再任をお願いして了承を受け、委員については中世古に一任された。しかし現況からみて、支部規約は〇名以上二〇名以内となっていて、その程必要と認められないで、本年は変則ではあるが数名にて行うことにて了承を受けた。後日以下のごとく決定した。

支部長 熊沢正夫（再） 副支部長 伊藤洋平（再）

委員 中世古隆司（再） 山田勇（再）
鶴田倍弘（新） 池沼忍（新）
会計委員 郡正也（再）
会計監査 村井喜一（再）
一、昭和四十八年度事業計画

本年はこれといった目標は立てず、親睦を主体として会合を数回も程度にし、山行その他は役員会にてその都度立案する。

一、支部費について

現在支部費は年額一五〇〇円であるが、本年はそれに応えるだけの計画を持たないで、四十八年度は支部費は徴収しない必要と認めた場合のみ、その都度徴収することとする。

一、新事務所

名古屋千種区高見町五丁目三九番地 中世古方（電）〇五二一七六一
一五二八（千四六四） 以上

図 書 紹 介



遙かなる

未踏の尾根

—マカルー・一九七〇—

日本山岳会東海支部の主催するマカルー学術遠征隊の公的出版物である。総指揮熊沢正夫、隊長伊藤洋平、現地隊長原真等の隊で、東南稜から登頂に成功した。いろいろな意味からも最近にないすぐれたヒマラヤ登山隊であり、また、この出版物もAACKのチヨゴリザ以来のユニークなものである。

タテの人間関係から契約の人間関係を持つことにより、流動的、合理的、非血縁的な隊をつくり、原真の言う「日本的単一社会に対する挑戦」となった。親分子分主義の浪曲がこの隊の中に聞こえないことはこれまでにないスマーティさがある。さらに組織の運営に一定の技術化をはかるためにKJ法を導入している。日本人の関係をルールのない関係であるといふ中でKJ法の採用にはいろいろ問題があったようである。情報管理には梅棹忠夫の知的生産の技術、個人レベルから集団の技術へと改良してとりあげている。

もちろこれら方法についていけない隊員もあつたようだが、はつきりと「共通技術の採用に抵抗を示す人間にかぎって個性や独創性に乏しいものである」と示しているが、これは山登りだけでなく私達の生活周囲の問題としても重要なことであろう。

ここにも「仲間意識の強い閉鎖的な組織運営者」に対する挑戦があるともいえる。そして、良いと考えられたことはどんどん実行されていくという体質を持っているようである。出発前に歌を30曲余りをマスターしたり、トレーニングに日本拳法を取り入れたら、まことに面白い隊である。

人間論の中で「組織の中で個人のパーソナリティが大きな影響力を持つのは、彼が管理者の立場にある場合のみだ」といったようなかなりの独断もあるが、これは、西洋合理主義的な流れの中で、内在する東洋主義的なもののどうしようもない力ではなからうか。

本当は、フォロアシップの中で個人のパーソナリティの対立が必要であると考える。

座談会の部分もかつてのチヨゴリザのそれと同様に、かくしだてのない、しかも考えさせるものをもっている。

巻頭の白旗史朗の写真のすばらしさも忘れられない。（塚本圭一）
昭和四十七年十月
B5判 四〇四頁
カラー六二頁
茗溪堂、四八〇〇円

会 務 報 告

五月理事会
（二十二日午後六時、本会ルーム）
出席者 中屋 織内副会長、板倉 伊倉 松丸 近藤 春田 原 須田 宮下 大倉 山本 浜野 田村 浜口 今成各理事

▽議事
・ルーム移転祝賀パーティーの件（伊倉）
五月二十六日（土）午後三時から
会費五〇〇円で行う。招待者決定・
・新旧役員懇談会の件（伊倉）
六月二十九日（金）に行う。前会長、役員に謝意をあらわす
・上高地山岳研究所開所式の件（伊倉）

工事が後れ、開所はかなり先になるので次回理事会まで保留
・女性マナスル登山隊からJAC後援依頼の件（板倉）
ただ一回の登山のための臨時的な団体が団体加盟したのでは後援できない。少くとも登山隊員の大半がJAC会員である隊については考慮する
・アマゾン探検隊に今西会長が顧問就任依頼の件（山本）
JAC会長の肩書きで顧問就任承認
・小島島木、木暮理太郎生誕百年展（近藤）
丸善で十二月二十四日から二十九日にかけて開催、近藤理事に一任
・「山日記」の検討（松丸）
分冊にする件、広告などについて種

種論議

・地図センターから講習会の共催依頼の件(岡山、近藤)

企画に不明の点が多いので、さらに地図センターと交渉する。保留

・シャモニー国際アルピニスト集会の件(織内、春田)

申込みのあった関野寿、鈴木勝両会員の申込み要旨、山歴を審査して承認

加
・木暮祭 織内副会長、近藤理事参加
・ウェストン祭 中屋 織内副会長、板倉、伊倉、春田各理事参加

・十勝の支部長会議 板倉、伊倉、松丸各理事参加
・坂本直行氏個展

▽理事の任務分担について
次のように決定。

財務委員会 伊倉、宮下、板倉
総務・ルーム委員会 伊倉、板倉
高所登山委員会 原
自然保護委員会 松丸、春田
山日記委員会 板倉、山本
図書委員会 近藤、山本
指導委員会 田村、大倉
「山岳」委員会 近藤、今成
会報・書評委員会 春田
遭難対策委員会 宮下
医療委員会 浜口
海外連絡委員会 丹部、田村
青年・学生懇談会 山本、浜野、今成、大倉

婦人懇談会 須田
山岳研究所委員会 伊倉
支部連絡委員会 板倉
集委員会 神崎、山本
日山協、都岳連 丹部
▽常務理事について
常務理事は次のように決った。

板倉、伊倉、近藤 春田、宮下、浜野、神崎の七理事

五月評議員会

(二十五日午後六時半、本会ルーム)
▽出席者 織内副会長、渡辺、島田、今井田、佐藤、林、山崎、金坂各評議員 委任——小原、望月、中田各評議員

▽議事

渡辺公平評議員を議長として開会。織内副会長から新年度定款に基づく評議員会のあり方について説明。そして次の点を決定。

・評議員会は理事会とは、別個に開催し、理事会の相談役的存在として今後には開くことにする。

常任評議員を佐藤テル、望月達夫、山崎安治、金坂一郎の四名と決定

・本年度の評議員会は七月、十月、来年二月の各下旬を予定。

ルーム日誌(48年5月)

7日(月) 事務局新ルームに移転

9日(水) 常務理事懇談会
集委員会

14日(月) 第13回登山技術講習会
準備会

17日(木) 集委員会
第13回登山技術講習会準備会

22日(火) 理事会
25日(金) 評議員会

26日(土) 新ルーム記念パーティ
五月中来室者 三八四名

会 員 異 動

終身会員(48年5月)
一四三五 村尾 金二
三九〇六 藤井 保

物故会員
六〇五〇 白石 勝教 昭和四八・二

・一九逝去

四七七三 高橋 貞利 昭和四八・五
・一八逝去
六五四四 浜 正則 同右
六九四七 牛越 正
六九六五 片桐 一三

訂正
昭和48年2月新入会員七五四四長谷川、良彦は長谷河、良彦の誤り

図書室便り(昭和48・5)

新刊図書受入報告

信濃路寄贈

(1)石沢清著『北アルプス白馬ものがたり』昭和48

(1)日本職業スキー連盟寄贈
(1)川口邦雄著『日本の山岳気象 付録・日本の山岳地形と自然』昭和48

北海道撮影社寄贈
(1)石川俊夫監修・山口透他編『大雪山——中央高地の自然——』昭和48

あうる舎寄贈
(1)丹征昭著『北の山旅』昭和48

黒石恒氏寄贈
(1)エーデルワイス六人の集い編『山と花と民俗と——ネパール・ヒマラヤ』

トレッキング記録——昭和47
岩永信雄氏寄贈

(1)日本山岳会編『山岳——第2年第一号(複製版)』昭和48

(2)アルバム 2冊
定期刊行物受入報告

(【部報・会報】)
(1)山村民俗の会『あしな』No. 136

(48・4)
(2)この山岳会『月報』No. 141

(48・5)

(3)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 72 (48・5)
(4)日本地図資料協会『古地図研究』No. 38 (48・4), No. 39 (48・5)
(5)国立公園協会『国立公園』No. 281 (48・4)

(6)京都山岳会『京都山岳』No. 577 (48・5)

(7)東京宮林局『みやこ』No. 11(48・5)
(8)奥多摩山岳会『O・M・C・レポーター』No. 281 (48・4), No. 282 (48・5)

(9)長野県山岳協会『山岳協会ニュース』No. 28 (48・3)
(10)日本自然保護協会『自然保護』No. 130 (48・3)

(11)神奈川山岳連盟『みきわ木』No. 34 (48・5)

【雑誌】
(1)『地図』No. 41 (48・5)
(2)『岳人』No. 312 (48・6)

(3)『岩と雪』No. 31 (48・6)
(4)『山と溪谷』No. 416 (48・5)

(5)『創作』No. 117 (48・4)
【その他】

(1)岩手医科大学山岳部『ヒンズークン医療踏査報告』No. 71
(2)北海道大学山岳部『マッキンレー登頂報告』No. 72

(3)東京農工大学山岳会『ヒマラヤ登山隊計画書』No. 74
(4)日本職業スキー教師連盟『指導法講話』

(5)日本アンデス会議『アンデス第1号』
(6)清水勤労者山岳会『富士山遭難報告書』No. 72

(7)日本山岳会学生会部『ヒマチャル・ブラディッシュ・ヒマラヤ登山計画書』
(8)立教大学ヒマラヤ委員会『ヒマラヤ登山隊計画』No. 73

【新着海外雑誌】
1. "Der Bergsteiger" Jah. 40, April '73.

2. "Deutscher Alpenverein" Jah. 25, Heft 1, März/April '73.
3. "La Montagne et alpinisme" Année 96, No. 90 '72-5.
4. "Mountain" No. 26, March '73.

5. "Rivista mensile" Anno 93, N. 12, Dicembre '72.
6. "Sierra Club bulletin" Vol. 58, No. 3, March '73.

7. "Il Carso" Anno 3, N. 1, Dicembre '72.
洋書受入報告

Deutsches Institut für Auslandsforschung 寄贈

1. Karl M. Herrligkoffer "Kampfund Sieg am Nanga Parbat" Spectrum Verlag Stuttgart, 1971.

2. Karl M. Herrligkoffer "Mount Everest" Spectrum Verlag Stuttgart, 1971.

~~~~~  
本会図書職員交代

昨年四月から本会図書職員として、皆さんに親しまれた周布真理子さんは都合により六月末付で退任されることになりました。代って七月からは新たに影山笑子さんが図書職員として仕事をされます。なお図書委員会を中心とする本会有志で、去る七月七日、お二人の歓迎会を致しました。

「山岳」第二年二号複製版

「山岳」第二年二号の複製版ができました。今までの複製版はいずれも好評で、既に品切れになったものもありますので、早めにお申し込み下さい。

価格 一、八〇〇円  
送料 二〇〇円

## 除籍者氏名

左記の会員は、会費滞納のため、定款第十二条第一項の規定により、本会台帳より除籍されました。復活ご希望の方がありましたら、その手続きをとられますようお願いいたします。

昭和四十四年度以降未納  
三七九四 ふそう山岳会  
四三三八 成城大学体育会

山岳部

四三七八 丹羽 秀臣

四六〇〇 小野 尚俊

四六八七 日本女子大学

山岳部

四七二二 吉田 英輔

四九六五 香野 弘志

五〇九六 東京女子大学

五二九〇 遠藤 隆三

五三二三 小林 宏

五三五四 栗原 祥

五四四四 渡辺 広

五四四七 瓜生 謙吾

五四七七 楠目 高明

五六〇二 細川 雅弘

五六〇七 羽津恭之祐

五六三八 宮野 準治

五七〇六 菅原 啓一

五七二七 大和多正嗣

五八一七 大倉 大八

五九三一 三田 紀夫

五九七八 水瀬 昭典

六四三九 望月 恭一

六四四二 鈴木 英雄

六四九五 William M. Bueler

六四九九 時田 昌幸

六五〇八 奥山登志夫

六五二一 丸山 愛子

六五六五 吉川 昭

六五八九 佐々木利男

六六〇一 神戸 源義

四四七六 相川謙二郎

六三三九 中村 哲彦

五三九五 菊池 義男

二七二二 三浦 通庸

四九〇八 木村重太郎

五七六〇 碓井 橋造

四一九二 阿部 瑋三

四七一〇 鈴木 修悦

四〇二二 二木 計臣

五八四二 だけかんば山の会

六四三〇 白木 正俊

六四六九 山崎 治郎

五一七九 南山大学山岳部

五一八二 一柳政右衛門

五七四〇 青木 寿

五七八五 吹原 優二

五八〇九 兼田喜代志

六〇三六 大木 勇夫

六二二〇 中村 安之

六三六八 浜井 文礼

六五一二 森 迪彦

六六四九 橋本 篤孝

六六七三 曾我 謹昭

三九九五 荒川 寛義

四三〇六 石川 明

三一四五 小松高校山岳部

六三〇三 西田 貞夫

四〇三六 福井 健吉

四〇六五 木村 碩志

四四二一 山本勇太郎

四九七五 杉野 善彦

五七三五 中西 達

五八七七 松井 精二

五八八六 林 令子

六〇四一 川西 康彦

六一七八 浅野 晃

六四二〇 荻谷 洋子

六四六四 長田 建一

六四七四 中西 哲

六六三八 山崎 制義

四三六九 市丸 隆司

北海道

岩手

福島

越後

信濃

静岡

東海

富山

石川

関西

山陰

福岡

六〇二二 九州大学山岳部 福岡  
六三三二 中馬 一枝 熊本  
五三〇一 森 政孝 熊本  
五四九五 長沢 和俊 熊本  
五五〇一 花輪 武彦 熊本  
五八八七 田中 治彦 熊本  
六〇二一 長久 実 熊本

## アンデス山系の『氷河』の写真を送っていただけませんか？

最近、アルゼンチン国立理工学研究  
所から、北大工学部の東晃教授あてに  
表記のような依頼があり、同教授から  
山岳会へ協力を求められたので、ここ  
に依頼文を掲載して、会員諸君の協力  
を求めます。

アルゼンチンのメンドサ州、サン・  
ファン州付近の河の流量が、この二、  
三十年間に非常に減ってきて、農業用  
水に深刻な影響がでてきています。こ  
の減水の大きな理由は、源流の氷河の  
衰退にあるのではないかと見込みの  
もとに、アルゼンチン国立理工学研究  
所では、アンデス山脈の南緯三〇度か  
ら三十六度までのアルゼンチン側の氷  
河の写真を蒐集して研究を進める計画  
を立てております。すでに同研究所員  
のペーダー博士から世界各国の登山団  
体や山岳雑誌に対して、このようなお  
願いの手紙が出されておりますが、日  
本からもこの地域（アコンカグア山群  
の南北）には相当多くの登山隊が入っ  
ていることから、氷河学を専攻してい  
る北大工学部東 晃教授に依頼があり  
ました。

この地域の氷河の写真をお持ちの方  
は多少にかかわらず、大体の撮影年月  
日、撮影場所、その他参考事項を添え  
て、下記へお送り頂けませんよう  
か。またこの種の写真を集めておられ  
る個人、団体、掲載されている雑誌、  
または特に古い写真についての情報を  
御存知の方の御協力を願います。

六二二五 中桐 恒和  
六四六六 山本 喜義  
六五七八 Richard F. Dickinson  
六五九五 西尾 彰  
四八三七 中村 保  
六二七七 木野 惲 海外  
六六六九 佐藤 聖美 海外

送り先  
Consejo Nacional de Investiga-  
ciones Científicas y Técnicas,  
Calle Rivadavia 1917, Buenos  
Aires, Argentina  
または  
一〇六 札幌市北区北一三条西八丁  
目 北海道大学工学部応用物理教室  
東 晃 先生

## イタリア山岳会主催 国際山岳写真展の案内状

## 夏山スケッチ教室開催

第1回 8月10日(金)～13日(月) 3泊4日 3日間  
第2回 8月13日(月)～16日(木) " "  
第3回 8月16日(木)～19日(日) " "  
会費 3泊(3食付)講習料共 6,900円  
講師 松岡寛一画伯(神戸在住、洋画家、無所属)  
定員 1回20名 申込金 1,000円  
申込 住所、氏名、年令、職業、電話番号ご記入の上  
第何回と明記、申込金同封して下さい。要  
項をお送りします。

## 剣岳、立山、大日岳登山基地

立山雷鳥沢温泉 ロッジ立山連峰  
(日本交通公社、日本旅行指定)  
電話 0764-41-2345 (立山山頂)  
事務所 富山市梅沢町3-30  
電話 0764-21-1446 (富山)  
— 1泊2食 1,800円より —

本会宛に表記の案内状が来ていま  
す。文面によると、白黒部門、カラー  
部門、スライド部門があり、題材は山  
に関係があれば、風景、登山風景、動  
植物など何でもよいと書いてありま  
す。写真の大きさや、応募規定などい  
ろいろとあるようですので関心をお持ち  
の方は、会のルームまでお問い合わせに  
なして、文面をコピーされるよう、お願  
いします。電話の問い合わせに対して  
は答えできません。

昭和四十八年七月十日発行  
東京都文京区湯島一六六一  
利根川商事(株)さくらビル  
発行所 法人 日本山岳会  
編集代表 春田俊郎  
(813)二二八六(代表)  
振替口座東京四八二九番  
東京都港区赤坂一丁目三番六号  
印刷所 株式会社 技報堂

# “ヒマラヤ山岳の旅18日間”

問い合せ先  
三井航空サービス株式会社  
旅客部団体課  
東京都港区新橋1-18-1  
電話 (504) 0271 (大代表)

期 間：昭和48年11月11日～11月28日  
昭和49年3月10日～3月27日

費 用：¥358,000 (ローン可)

定 員：15名

御案内人：エベレストビューホテル社長  
宮原 巍氏

安全対策：医師並びに参加者の皆様の安  
全を図るために、現地人医師  
を第9日目より15日目までエ  
ベレストビューホテルに滞在  
せしめると共に、酸素ボンベ  
の用意も致しております。

日 程：

第1日目 東京→ニューデリー  
第2日目 ニューデリー→カトマンズ  
第3日目 カトマンズ滞在  
第4日目 カトマンズ→ポカラ  
第5日目 ポカラ滞在  
第6日目 ポカラ→カトマンズ  
第7日目 カトマンズ滞在  
第8日目 カトマンズ→ルクラ：徒歩にて  
モンジョへ(モンジョテント泊)  
第9日目 モンジョ→ナムチェバザール  
第10日目 ナムチェバザールより徒歩にて  
エベレストビューホテルへ

第11日目 エベレストビューホテル滞在  
第12日目 エベレストビューホテルよりタン  
ボチェトレッキング(タンボチェ泊)  
第13日目 タンボチェよりエベレストビュー  
ホテルへ  
第14日目 エベレストビューホテル滞在  
第15日目 エベレストビューホテル→カト  
マンズ  
第16日目 カトマンズ滞在  
第17日目 カトマンズ→カルカッタ  
第18日目 カルカッタ→東京



